

死ぬのが怖かった若者たち

斎藤憐

「あのね、ベトナムの戦場から脱走して来た兵士がいるの。憐、彼らを匿う場所ないかしら」

ロシア文学者のU子さんから電話を受けたのは、イリア・エレンブルグの小説を下敷きにした『トラストD E』を書いていた時だから、一九六九年のことだろう。僕は、ロシアの演出家メイエルホリドが二四年に上演した『トラストD E』とは別に、ベトナム戦争、パリの五月革命、ソ連のプラハ侵入、大学紛争などこの時代の事

件をぶち込んだミュージカルを目論んでいた。

あの日から三〇年近い年月を経て、「あの時代に脱走兵を支援したジャテックの人びとの記録を残したい」とのお話をいただき、実際に米兵を匿った過程や米兵たちとの生活について思い出そうとしたが、ほとんど記憶が失せている。僕のように組織の末端で、コーデイナーの指示通りに動いていた者にとっては、その当時の自分と自分のさわった断片「象の尻尾」しか書くことができない。

その上、僕は「見て来たような嘘をつく」のが商売で、話を面白くしようと嘘の上塗りをしていくうちに自分でも、事実なのかフィクションなのか区別がつかなくなるほどだから、これから書くことも事実だったと言い切る自信はない。

二八歳の当時の僕がどんなふうに考えて、このかなり厄介な仕事に携わることを決意したのだろう。

前年の六八年の一月には、ベトナム脱走米兵がキューバ大使館に逃げ込み、九月には小田実さんや鶴見俊輔さんが「日本人脱走米兵」に関する記者会見を行っていた

から、「やっぱりアメリカ人というのはすげえなあ。一五年戦争の間に皇軍のなかからいったい何人の脱走兵が出たのだろうか」と考えてはいた。

米国は、明治維新以前の日本みたいな農業国ベトナムに傀儡政権を作り、近代的兵器を持ち込んで農民と農村を焼き尽くしている。ベトナムの人びとは、自らの何千倍の火力を持つ米軍に対して、自分と自分の愛する者の生活を守るためにニョクマムをかけただけの飯を食らいながらジャングルのなかで戦っているのに、自分は手をこまねいている。いや、自分の祖国日本は米軍の殺戮に加担している。そして、ベトナムの戦線から人殺しをやめようと決意した兵士が脱走してこの日本のどこかで行く当てもなく彷徨っている！ その兵士たちの戦線離脱を支援するのは、人間として当然のことだ。それは頭ではわかる。

でも、当時の僕は麻布の地下に定員五〇人の「自由劇場」を作ったばかりで、劇団員が三人しかいないのに、年に六本の新作を上演していた。自分の劇団の脚本を書いたり制作の仕事をしたりしても一銭のお金にもならなかったから、照明のオペレーターやファッション・シヨ

団が次つぎと旗揚げして、それまでの日本の新劇が持っていた政治優位の、いや、前衛党の指導の下にあった演劇を批判していた。

僕は演劇という船にはどんな荷物（題材）を積み込んでもいいのだと考えていたけれど、大学でスターリンに粛清された演出家メイエルホルドを専攻していたせいもあって、演劇や文学が、政治の僕になることは抵抗があった。

そして、だからこそ、演劇を離れてこの地球上に共存しているひとりの人間としての活動もしてみたいと思ったのだと思う。

そして、生来チャランポランな僕は、劇団を作る時も、そしてその後も「やるかやらないか迷った時は、やらなきゃゼロだから、とりあえずGOだ」と、走り出したのだと思う。

「匿ってくれる家がなくなった兵士がいるので、一週間でも預かって欲しい」と僕に電話をかけて来たU子さんの友人とそれに連なる人びとは、みなさん放送関係で仕事をしていらっしやる方が多かった。

ーの演出などをしていたが、今考えてもどうして食べられたんだろうと不思議に思う。だから、この時期、他人の世話にはなつてはいただろうが、他人の世話をする余裕なんて僕にはなかった筈だ。

米軍キャンプの金網の向こうから「戦争のない異国」に飛び出した米兵たちを支援した多くの人びとも、僕と同じように目標のはっきりした運動に参加するという意識や展望を持つてはいなかったらと思う。なぜなら、日本は政治亡命を認めていないし、彼らをどうやって安全な第三国に送れるかも知らなかったのだから。

おそらく、高度成長の始まった当時の日本にぬくぬく生きている自分と、毎日マスコミによって報道されるベトナムの惨劇との落差のなかでいたたまれなく、とりあえずできるだけのことをしようと考えたのだと思う。この行動に加わった世代は、一五年戦争とその後の貧しさの記憶が身についていて、始まったばかりの消費社会に違和感を持っていたのだと思う。

ただもうひとつ、当時の僕たちには政治と演劇という問題があった。「新劇の戦後は一五年遅れた」と言われるように、六六年頃からいわゆるアングラ、テントの集

僕も偽名を作るように言われ、相手側の本名を知っていないながらも、この仕事の場合に限っては、偽名で電話連絡をした。しかし、人びとにいったいどこから連絡が入り、また、どこでジャテックの方針が決まって行くのか、またその組織にはどれほどの人間が参加しているのか僕は知らなかった。

おそらく、誰かが自分が信頼できる人間に援助を求め、その人間がまた自分の信頼できる人間を探して次つぎに広がっていく、いわばベスト菌のような組織だったのではないかと思っている。

大学時代に感銘を受けた「思想の科学」の『転向』には、戦中の反戦組織の地下活動がレポを伝える人間と伝えられる人間という単線の関係のみだったとあった。黨員のひとりが警察に掴まっても組織全体が一網打尽にはならないようにしたこのシステムが、個人活動家にとっては組織の全体像を見えなくさせ、その孤立感が転向に結びついたとあったと記されている。

ジャテックも、全体が見えないという意味では似ていたが、中央の指令で末端が動くといった組織ではなかったし、たとえば中心になっていたと思われる小田実さん

や鶴見俊輔さんも、組織の末端のメンバーを掌握していなかったろうし、もちろん活動家名簿もなかったろう。

僕個人にとっても、連絡をして来るふたりのメンバーの電話番号と偽名を知っているのみで、僕が助けを求めた僕に連なる人間のほうが多かった。そして、ほとんどの人が、僕のように自分はジャテックのメンバーだという意識を持っていなかったのではないだろうか。だからこそ、あの日々から二〇年が過ぎた今、その勝手に増殖したバスター菌をたどって、なんとか記録を残そうという人びとが今回の企画を考えたのだろう。

しかしながら、あの時は僕は偽名を使うことにまるでスパイ小説のようだと半分照れながらも、これはやはり非合法活動なのだから、組織防衛のためには必要なシステムだと思っていた。

このように書くと、なにやら決死の覚悟で参加したごとくに思われてしまいそうだが、僕は、「時代がちがわあ。どうせ掴まっても大したことはない」と考えていた。

僕のあやふやな記憶によると、初めて米兵を引き渡されたのは、夜の九時ごろだったような気がする。コーデ

たダイニングに布団を敷いて寝たのだろう。そして、僕の知る由もないそうした市井のボランティアたちは、この二〇年ずっと沈黙を守っている。

玄関で、兵士が世話になっていた家庭に小声で、お別れの挨拶をしている間、車の中で待つ僕は、やっぱりどきどきしていた。なんたつてこれから預かるのは、新聞やテレビが報道している、あの小さなベトナムに人殺しをするために投入された五〇万の兵士のひとりなんだ。

国会南通用門で二〇歳の僕を、横須賀のアメリカ海軍基地のゲート前で二五歳の僕をしこたまぐったのは日本の警察官であつて、殺し合いが目的の兵隊じゃなかった。今、初めて世界最強の軍隊と言われた米軍兵士に会った。そう。敗戦の年の一二月、引き揚げ船の停泊する韓国プサンの港で、初めて出会ったアメリカ軍兵士。五歳の僕の目の位置にある奴らのかい尻。とにかく自分とはちがう別の生き物にしか思えなかった。

だが、玄関から出て来た平服の彼の姿は、僕の予想を裏切った。短い挨拶を交わして車の後部座席に乗り込んだ瘦せつぱちの元米軍兵士は、青年というよりはまだ少

イネーターの女性と輸送用の車を用意して向かった先は、なんと我が家から五〇〇メートルも離れていないご近所さんだった。

セメント製の瓦屋根が並ぶ郊外の造成地の一角にある建坪二〇坪にもみたくない建て売り住宅のような家。細い道に面していきなり玄関のあるサラリーマンらしい方の家には、恐らく一〇歳程度の子どももいたであろう。そのご主人は、いったいどんな知り合いから脱走兵の話を持ち掛けられ、預かる決意をしたのだろうか。

当時、米兵の戦争からの逃亡を支えた、僕の会ったことのないジャテックの仲間(?)たちは、決して人の世話をする余裕を持った人びとではなかったのだ。

この活動のために、家庭不和を招いた一家もあったと聞く。それはそうだろう。狭い兎小屋に、生まれも育ちも言語もまったくちがう他人と一緒に飯を食い、風呂に入りもすれば、これはくたびれる。旦那さんが会社に行つた後、米兵と奥さんはどうやって長い一日を過ごしたのだろうか? 奥さんは英語がかなり喋れたのだろうか?

脱走兵を匿うために、あの一家の誰かが食事の終わっ

年だった。

見送りに出たその家の人の顔は暗くて見えなかったし、後日、散歩の途中なんぞで会つたりして、知らん顔というのも変なので顔を見ないようにしていた。

助手席に座ったコーデイナーと米兵は、この何日間の生活に関して話をしている。

「食事は、困らなかった?」

「とてもおいしかった」

「なにか不満は?」

「なにもない」

「なんにもないの?」

「時間があまりすぎて……」

「退屈はしょうがないじゃない」

「うん。しょうがないな……」

僕は暗い気持ちになった。この男の逃亡生活をいつまで支えて行けばいいのだろうか。

今では、世界の人があつたベトナム戦争の幕切れ、ヘリコプターでアメリカが大使館から逃げ出したことを知っている。しかし、六九年の時点で、六年後にベトナムではなくアメリカの敗北によって、この戦争が終わるなん

てことをいいたい誰が想像しよう。

隣に座っているこの青年は、働くこともできずに誰かの世話になりながら、無為に年を取って行くのだろうか……。

車は高校時代の後輩で、自由劇場を一緒に創立した串田和美さんが借りている新大久保のアパートに向かう。歩いて数分の僕の家は数年前に父と兄を続けざまに失い、部屋は十分にあまっていたが、キリスト教の熱心な信者である母親は「絶対いやよ、そんな罪人を預かるなんて」と宣い、「イエスだって罪人だったじゃないか」とまあ馬鹿馬鹿しい口喧嘩の揚げ句、僕はキリスト者の愛なんて一生信じまいと決意して、串田さんに事情を話したのだ。

車が赤信号で止まった横に交番があり、短い沈黙。職務質問されて脱走兵であることが露見したら、兵隊とジャテックという組織と、そして僕はどうなるのかとチラと思つたが、あまりに平和な町の風景のなかでそんなことを考えるのは、戦前の非合法組織の地下活動を題材にした小説を読み過ぎたからなんだと思うことにした。

串田さんの仕事場（当時は俳優だった彼がその部屋でと

んな仕事をしたのかは定かではない）は、台所にトイレがついている殺風景な六畳間だった。

帰る前に、コーデイナーから兵隊を預かる人間の注意事項、あるいは本人の性格や好きな物などについて説明があつたはずだが、これもまったく覚えていない。

部屋にふたりだけになって、アジアの青年と祖国を裏切った少年は、カタコトの英語でポツリポツリと話した。アメリカ中西部のファーマーと言ったような気がするが、それは記憶なのか、後になって僕が想像したのか定かではない。

彼の名前はもちろん、顔さえ思い出せないのに、彼の書いた詩のことは覚えている。

上空の飛行機から見たベトナムの山々、自然の美しさ。それを破壊する自分……。

二八歳にもなつていた僕が勝手に描いていた「反戦脱走兵」という英雄のイメージはそこまでだった。

僕は、この小さな部屋で外出もできずに何日間かを過ごさねばならない彼の不幸を思つて、「何か欲しいものはないか？」と聞いた。

「ドラッグ……」

おそらく当時の僕も、ベトナムの戦場で、恐ろしさのあまり米兵たちが麻薬を常習するようになっていたという噂は聞いていたろう。だが、この平和な日本の中に住んでいる「反体制派の青年」として、麻薬はアプロオリに悪であった。戦後社会問題化した覚醒剤も、戦時中の軍需工場で、女子挺身隊の乙女たちを徹夜で働かすために国家が大量生産したものを、戦後国家が取り締まっているという矛盾は知っていたのだが……。

今にして思うことだが、軍隊を脱走し政治亡命を認めない異国の地に浮遊している彼にとって、麻薬の罪など国家反逆罪に比べたらいかほどのものであつたろう。

沢山の戦記文学や遺稿集を読んで、戦争の悲惨さと国家による正義の前に個人の力がいかに小さなものであるかを理解したつもりでも、アメリカに作つてもらった憲法のお陰で戦場に行かされずにすんで来た僕には、彼の生理的恐怖は理解できなかった。

今になって歴史年表を見ると、六七年から六八年にかけて、学園紛争、三里塚闘争、ベトナム反戦運動の嵐が吹き荒れていたかのように見えるけれど、大部分の日本の若者たちは、昭和元祿、イザナギ景気の中、「モンキ

ーズ」に熱狂し、大人たちは月の映像を送ってきたアポロに、豊かであつたいいアメリカを見ていたのだ。

それから少年は僕に、麻薬なしで「ハイになる方法」を教えてくれた。それは、ガスを管をくわえてガスを吸うこと、それもない場合は電球を外してソケットに指を突っ込むと自分を忘れることができるというのだ。

数年前に兄を亡くしている僕は、翌日、サンドイッチを買い置いて、彼をひとりこの部屋に残して芝居の稽古に行くことに不安を感じた。でも、麻薬の次に彼が欲しいものが「GIRL」だと聞いて、こいつはまだ生きていく気だ、大丈夫だと思つた。

さて、彼を何日、串田さんの仕事場で預かったか記憶にない。先日、串田さんに聞いてみたが、「アパートの場所は、今のグロブ座へ行く通りを入った所だよ。うん、夜に部屋に帰るとポツンとひとりでいたなあ。とても子供みたいな奴だったなあ」ぐらいである。

その、詩を書いた少年の名前さえ覚えていないのだから、その後、いつ、どんな兵士を何人預かったか、その兵士の名前や肌の色さえほとんど記憶がない。

たとえば、テレビマン・ユニオンの坂元良江さんと西

武池袋線あたりの住宅地を話しながら歩いていて一シーンは記憶にたしかにある。だが、その情景も、解説なしのアルバムの一葉の写真のように、いつ何のためにそこに行ったのかさえわからない。

もうひとつ、記憶に残っているのは、湯河原の別荘。黒人のふたり組を連れて行ったような気がする。

最初に少年を串田さんの「都会の中の監獄」に閉じ込めてしまった苦い経験から、自由劇場で『トラスドD E』を演出してくださった観世栄夫さんの湯河原の別荘に僕は目をつけた。以前、『赤目』という芝居を書く時に、観世さんに連れられて行って、谷崎松子夫人に「ここでお仕事なさってください」と通されたのが谷崎潤一郎の書斎。巨匠の万年筆などが在りし日のままで、「数々の名作が書かれたこの机でくだらん芝居なんぞ書いたら天罰で僕の手は腐ってしまう」とおののいた記憶がある。

あそこなら、庭も広いしお手伝いさんもいるから、僕は芝居を書きながら預かれると思い、観世さんに無理を言ったわけだ。車で送ってくれたのは、やはり高校の後輩で自由劇場に出入りしていた服部良次さんだった。

ンで、取材に出て行く男たちのお握りを握っていたという。

バンコク市内の「フロント・ページ」というベトナム料理のお店には、その名の通り、世界各国のカメラマンが命をかけて撮った報道写真のパネルがならんでいた。ベトナムの漂流する母子、天安門広場の戦車に立ち塞がる青年……。

一九七五年のサイゴン脱出後も、アジアの国の中に残った真理子さんは、懐かしそうに語った。

「お亡くなりになった方がたもいるけど、本多勝一さんやNHKの平山さんたち、みなさん偉くなられて……」二〇年前のサイゴンでマドンナと呼ばれた真理子さんのお話を聞くうちに、僕は断然、一介の日本人ダンサーの物語を舞台化したくなった。

僕たち日本人がたとえば「戦後」というと、あの一五年（大東亜）戦争の敗北を指すのであって、朝鮮戦争やベトナム戦争のことではない。

僕個人にとっても、一五年戦争へ奈落を落ちて行った時代と、その後に興味の対象が集中し、その間の庶民の

お手伝いさんが、夜ごと近所のミカン畑からミカンを拾って来てくれた記憶があるから、六九年の暮れか七〇年の初冬ではなかったかと思うが、彼らとどう暮らしたのかはやっぱり覚えていない。

しかし、記憶喪失は、僕の健忘症のせいばかりではないような気がする。

あの日から二〇年の月日が流れて、僕は、米軍兵士慰安のためにベトナムの米軍基地を転々としていた日本人ダンサーの物語『ソング・オブ・サイゴン』を上演した。

ベトナム戦争当時、民族解放戦線のなかにいて米軍と戦った日本人野村弘さんの書かれた小説『志願兵』の映画化にあたって、その台本を依頼されたことから始まった。僕はシナリオ・ハンティングのためにタイを訪れ、その『志願兵』の後書きに当時の思い出を書いている元ダンサーの嶋田真理子さんにバンコクで出会った。

いわゆるテト攻勢以降、ベトナムの前線は慰問どころではなく、彼女は当時、サイゴンの日本人新聞記者やカメラマンのオアシスだった「京」という日本食レストラン

心を描こうとしてきた。だが、一五年戦争は、僕の生まれる前に始まり、五歳で外地から引き揚げた時が僕の記憶の始まりだから、僕はその戦争の被害者でいられたし、自らのことを置いていて戦争に突入した軍部とそれを支えた大衆を告発していれば済んだ。しかし、それこそ、世界のなかで一番かわいそうな人を見つけ出し、その側に立って、舞台の上からお説教をするあの「新劇」の精神ではないか！

嶋田真理子さんにとって、ベトナム戦争は「対岸の火事」ではなかった。そして、真理子さんが世話を焼いた男たちはみんな日本に帰って偉くなった。

僕は日本に帰りつくと、すぐさま、鳳蘭さんに「あのね、ラスベガスのステージに立たせてやるって騙されてベトナムの戦場に連れて行かれたアホなダンサーの話をミュージカルにしたいんだけど」と電話した。

それから僕は、台本を書くために、開高健さん、岡村昭彦さん、沢田教一さんたちが残されたベトナム戦争についての膨大な記録を読みあさりはしたが、自分のかかわったジャテックの日々のことをまったく思い出しなかった。

フリーの日本人カメラマンと、アメリカ人になるためにベトナム行きを志願した沖縄出身の米兵と踊り子の物語、『ソング・オブ・サイゴン』は、九二年七月、渋谷のパルコ劇場で上演され、実際にベトナムの戦場でシャッターを切っていた石川文洋さんが観に来てくださり僕は冷や汗をかいた。

翌九三年秋、「神戸オリエンタル劇場」で再演されることになって、僕は今や名人になった二〇年後の生き残ったカメラマンの今、現在のシーンの改稿を始めた。

五歳で米軍にDDTをぶっかけられ、一〇歳の時に朝鮮で苦戦するマッカーサーのことを心配し、二〇歳で安保闘争で反米派の一員に変身した僕は、ベトナム戦争というのは、アメリカにとっては領土的、あるいは資源的野心のないまったくの「正義」の戦争だったことがわかってきた。民族も言語もちがう人びとが作った国アメリカには、いつも国民を束ねる「正義」が必要で、それが禁酒法やらマッカーシズムといったわけのわからぬ国民的キャンペーンを必要としたのだということを。だからこそ、アメリカでは今も、国家反逆が重罪であるのだということを。

一昨年、メイエルホリドの弟子だった故にスターリンに国外追放になり、メキシコで死んだ演出家佐野碩の芝居を沢田研二さんに書き下ろした。そして、佐野碩の従兄弟に当たる鶴見俊輔さんと芝居のパンフレットで対談する機会があったが、その時にも僕は鶴見さんにジャテックの話をしなかった。

今回この企画で、「俳優の山本三兄弟のひとりもメンバーだった」と聞き、高校時代から一緒に芝居をし、『ソング・オブ・サイゴン』では、JAIICAから派遣された酒飲みのドクター、「サイゴン病院の赤髭」の役をやってくれた山本圭さんに電話で問い合わせたら、「そりゃあ、弟の亘だろう」

そして、山本亘さんから、脱走兵のひとりを上高地の山小屋に連れて行ったことなどを聞き、ふたりで「こんな近いところで支援活動をやっているなら、お互いに知らなかったんだなあ」と言い合った。

ジャテックは、ペスト菌のように自己増殖していく、あの時代にしかあり得なかった性質を持っていて、その活動の全容は、今から追跡調査をしても、明らかに知らないような気がする。

再演の初日を前にしたある日、朝日新聞の記者と名乗る方から電話が来た。

「あなたは、今から二〇年前ほどにベトナム脱走兵を匿ったことがありますね」

一瞬、記憶の霧の中に閉じ込められていた数コマのフィルム影が、頭の中を走った。

そして、次に「誰が僕の名前を出しやがったんだ」と思った。

だが、しばらく電話で話しているうちに、「ああ、あの脱走兵支援の話もう時効になったのだなあ。そうだよなあ。アメリカがベトナムと対話する時代が来たんだものなあ」と遅れ馳せながら気づいた。

そして、自分でベトナム戦争を題材にした芝居を書いている最中にも、自分が関わったジャテックの体験を思い出さなかったのは、自分で記憶を消していたのだと気づいた。

僕はあの日々に出会った二〇歳の少年たちと別れてから後、彼らがどこへ行ったか、今はどうしているかも迎ろうとはしなかった。

ジャテックに関わった時期、まさに小劇場の戦国時代であり、二時間以上の睡眠を取った記憶がないほどの忙しさと貧しさの中で、僕はなにほどのこともしなかったと思う。

でも、組織の綱領や理念を語るわけでもなく、いろいろな状況を抱えた人たちが、「ベトナム戦争からの脱走兵」という言葉だけで、支援の輪を広げることができたいい時代だった。

ベトナム戦争は、干渉されたベトナムにとってだけでなく、アメリカにとってもわりに合わない戦いであり、その無益な戦線から脱走した兵士を匿うことは正義だった。

しかし、その後のベトナムのカンボジア侵攻、ポルポト政権による大量虐殺、そしてソ連東欧における社会主義の崩壊を経験して、人間の集まりが「正義」を手にするといかにたやすく恐ろしいことをするものかを思い知らされた。

だから僕たちは今、寡黙にならざるを得ない。

しかし、地球上に同じ時代に生まれ合わせた人びとと、どういうふうに繋がっていけばいいのかを考えることを

やめてしまつていいはずはないのだ。

ジャテックの正式名称は、「反戦脱走米兵援助日本技術委員会」というのだそうだ。

僕が、このジャテックの末端でかすかにお手伝いして出会った米兵たちは、とても反戦脱走兵と呼べる英雄たちではなく、まさにクリントン現アメリカ大統領が「卑怯者」と非難されているように、戦場が、死ぬのが怖かった若者たちだった。

だからこそ、戦場が、死ぬのが怖いということだけでも、平和の中に暮らす僕たち日本人が感じる必要が今もあるように思うのだ。